

研究ノート

＜クララ・ツェトキーンと文学＞に関する覚書

伊藤 セツ

Note on Clara Zetkin and Literature

Setsu Ito

はしがき

モスクワ1924年7月9日付け、クララ・ツェトキーン (Zetkin, Clara 1857-1933, 以下単にクララあるいはツェトキーンと略記する場合がある) の、ハンナ・ツェトキーン-ブーフハイム (Zetkin-Buchheim, Hanna¹) 宛の手紙がある。そのなかで、クララは、ハンナに『『平等²』から、シラー (1905年刊行と推定³)、ビョルンソン⁴の『われらが力について』、イプセンについて、のような論説、それ以外にもあなたが私の文学的な書きものと思うものを探しだしてください』と過去の自分の執筆物を送るよう依頼している (SAPMO-BArch NY4005/60, Bl.139-145)。

この手紙に具体的にあげられているものと「それ以外」と思われる主なものは、後にハンス・コッホ編のクララ・ツェトキーン『芸術とプロレタリアート』 (Zetkin 1977) に大方収録されているが、当時これらのものをハンナが探し出して送ったかどうか、それをクララが何に使ったかは、明らかではない。

これまで、私はクララ・ツェトキーンについて、その女性解放論だけに限定して研究してきた。本稿ではこの手紙から片鱗がうかがわれるクララ・ツェトキーンと文学との関わりを扱うことを試みる。クララが書き残したものの全体に目をやると、女性解放論は確かにクララの中心的テーマではあるが、文学・芸術・文化の領域の発言も、数が少ないとはいえ無視することはできない内容をもっている。

-
- 1 シュツットガルトにいるクララの秘書。クララの長男マクシム・ツェトキーンの最初の妻、SAPMO-BArch, NY4005のなかの多くの手紙によって、ハンナは1910年ごろクララの秘書となり、1918年頃に、マクシムと結婚したと推測される。1922年2月11日、男児をもうけヴォルフガンクと名づける。マクシムは1921年頃から、クララを助けるためモスクワへ行き、モスクワのクララの秘書エミリア・ミロヴィドヴァと親しくなり1929年にはハンナと離婚、エミリアと再婚したと判断される。
 - 2 *Die Gleichheit*, 1892年から1916年までクララが編集長をしていた、SPDの女性機関紙。
 - 3 クララの思い違いで、実際は1909年。
 - 4 ビョルンスタチャーネ・ビョルンソン (Bjørnson, Bjørnstjerne: 1832-1910) ノルウェーのノーベル文学賞受賞作家、詩人。「われらこの国を愛す」は後にノルウェー国歌となった。

大塚金之助は、1969年、その著『ある社会科学者の遍歴』のなかで、「ツェトキン⁵の名は、日本にもよく知られているし、かの女の人生や理論を研究した若い女性もあると聞いている。——しかし、ツェトキンには、芸術や文学や教育についての書きものもあるから、ドイツ古典芸術を知らないで、政治的・政治理論的にだけかの女をあつかっている、『必要にして十分』ではないだろう⁶」（大塚 1969:361）と指摘している。クララの教育論に関しては、研究者も多く、私も女性解放論との関係で目配りしてきたつもりであるが、文学・芸術・文化論については、彼女の書いたものやそれに関連する研究に立ち入らなかった。というより、私の守備範囲からみてとうてい近寄ることのできない領域に思われるからである。

本稿は、しかし、私のクララ研究のこの欠落部分をいささかでも埋めたいという目的で書かれている。まだ準備作業の域をでないが、作業は、これまでの私の研究のプロセスで気づいていたクララと文学（芸術・文化を含む）とのかかわり、およびクララの文学論に関する先行研究を覚書として書きとどめておくこと（本報では、第一次世界大戦前に限定される）である⁷。

ちなみに、2007年はクララ生誕150年である。続く2008年は没後75年であるので、この2年間に、私は、これまでのクララに関する研究で取り残してきたものを少しでも埋めたいと考えている。

1. クララと文学に関する概観

(1) 少女時代にどんな文学的環境で育ったか

クララの父ゴットフリート・アイスナーが、トルストイ型キリスト教徒であったことはすでに知られている。また、クララが生まれたドイツのケムニッツ近郊ヴィーデラウ村は、ゲルハルト・ハウプトマン（Hauptmann, Gerhart, 1862-1949）が戯曲『織工たち』（*Die Weber*, 1892）のなかで描いた雰囲気をもっていた。このことはクララ自らが後にそう書いたと旧東独（以下 DDR と略記）の伝記作家ルイーゼ・ドルネマン（Dornemann,

-
- 5 大塚は、ツェトキーンではなくツェートキンと Ze にアクセントをおいて発音し、仮名書きした。
 - 6 ここでいう「若い女性」というのは、多分1960年代半ばの私のことである。なぜなら私は当時政治的・理論的にクララ・ツェトキーン的女性解放論だけを扱って抜刷を大塚に送っていたからである。この大塚の言葉はいつも私の念頭にあった。当時の私の習作の論文名は次のとおりである。松原セツ（1964a）「クララ・ツェトキン研究序説—その生涯とプロレタリア婦人運動」『北大経済学』No.5., 松原セツ（1964b）「クララ・ツェトキン研究序説 その二—クララ・ツェトキンはドイツプロレタリア婦人運動史をいかに論評したか」『北大経済学』No.6., 松原セツ（1965）「研究ノート：第二インタナショナル期のクララ・ツェトキンの婦人論」『北大経済学』No.8., 松原セツ（1966）「研究ノート：C. ツェトキンの国際プロレタリア婦人運動指導方針（1920）について」『北大経済学』No.9., 伊藤セツ（1967）「初期コミンテルンの婦人運動方針とクララ・ツェトキンの役割」『北大経済学』No.11..
 - 7 自らが文学作品に描かれたクララ、すなわち、アラゴンの小説『バーゼルの鐘』におけるクララ、も興味深いものがあるが、他の機会に取り上げることとする。

Luise)⁸ が指摘している。どこでそのようにクララが書いたか出所を私は確認していないが、クララは世界に知られる詩（フェルディナント・フライリヒラート「シュレージエンの山間より」1944やハイネ「シュレージエンの織工」1944）、戯曲（ゲルハルト・ハウプトマン『織工たち』1893）や版画（ケーテ・コルヴィッツ「織工たちの蜂起」1897）に描かれた環境でもの心がついたとしたら、そのこと自体すでに彼女にとって大きな意味を持つものである⁹。

ドルネマンは、さらにクララは読書が好きで「シラーやゲーテの作品、ホメロスのイリアスやオデュッセイ、すこし大きくなってからはシェイクスピアの戯曲、ディケンズやバイロンの作品などを、何時間でも読んだ。しかし、なかでもとくに印象深かったのは、けっして読みあきることのない三冊の本だった。うち二冊は屋根裏から見つけたもので、一つは絵入りのフランス革命史、一つはスイスの盟約者たちの解放戦の物語だった。彼女はこの偉大な自由の戦いの物語に夢中になり、村の青少年のあいだに話をひろめ、その劇をやったものだった。のちに彼女は言っている。『私は何度もアルノルト・フォン・ヴィンケルリートとして、自由のために死んだものでした』。もう一冊は父の書架で見つけた。教皇制度に対する各地の教会の歴史である。」（Dornermann1957=武井訳1969：16）。

その後まもなく、クララは、故郷ヴィーデラウを離れて、バッハ、ゴットシェート、レッシング、ゲーテ、シラーが活動した都市ライプツィヒ¹⁰に出たのである。

(2) パリでの生活の手段としての文筆活動時と文学

ライプツィヒで学業を終えた後、亡命先のパリ¹¹では、「インタナショナル」の作詞者ウジェーヌ・ポティエ（Pottier, Eugene 1816-1887）、パリ・コミューンの女性闘士であり詩人・作家でもあったルイーゼ・ミッシェル（Michel, Louise 1830-1905）らと知己を得ることになる。クララは1886年3月22日付けのカール・カウツキーにあてたパリからの手紙で、『ノイエ・ツァイト』（*Die Neue Zeit*）掲載予定のルイーゼ・ミッシェルについての原稿（Zetkin 1886）が遅れていることを詫びている¹²。

クララは、パリでの貧困のなかで、1870年代初頭から物語等文筆活動をはじめて1886年に『回想』をだしたルイーゼ・ミッシェルを先輩の同時代人としてリアルタイムで注目

8 ルイーゼ・ドルネマンはクララの伝記を1957年の初版以来1989年の9版まで加筆して出版した。私は1973年の3版までしか追っていない。ちなみに武井武夫氏による邦訳は1957年の初版である。

9 フライリヒラート、ハイネの詩、ハウプトマンの戯曲、ケーテ・コルヴィッツの6枚の連作版画「織工たちの蜂起」（「困窮」「死」「協議」「織工の行進」「襲撃」「顛末」）との関連については、志真（2006：36-64）参照。

10 ライプツィヒ時代のクララについては、伊藤（2005a）に詳しい。

11 パリ時代のクララについては、伊藤（2005b）に詳しい。

12 「私が（原稿の）半分しか送れないことをお許しください。その仕事をするのが私には非常に困難で、私はどうしても全体を完成することができなかったのです。私はさながら宮廷の針子で、料理女で、洗濯婦で、といったありさまで——、要するに『女秘書』です。加えて、一時も私を離れない二人の小さないたずらっ子がいます。」

し、ドイツに書き送り、1889年には U.S.A. のユートピア作家エドワード・ベラミー (Bellamy, Eduard 1850-1898) の『かえりみれば—2000年より1887年』(Bellamy 1888) を英語から独訳 (Bellamy 1888=Zetkin 1889) したのである¹³。

パリでのクララの文筆活動が、こうしてフランスのアナーキスト作家・活動家と U.S.A. のユートピアン作品に関するものであったことに注目したい。

(3) 『平等』編集長時代の社会主義文学評論活動

クララの本格的文学評論活動は1899年、画家、フリードリヒ・ツンデルと結婚して住んだ、シュツットガルトのジレンブーフの家での文化人、芸術家との交友から生まれている。クララは、ドイツ社会民主党 (SPD: 以下 SPD と略記する場合がある) のシュツットガルト労働者教育委員会に所属して、そこでの活動として、また1892年以降1916年まで率いた SPD の女性機関紙『平等』とその付録『われらが女性と母のために』を場として文学評論活動を展開した。

冒頭に引用した手紙のように、クララ自身、晩年にははっきり記憶をしていないようであるが、彼女が当時書いた文学に関するものを年代順に示すと、次のようになる¹⁴。

「自由の詩人 クララ・ミュラー」(Eine Dichterin der Freiheit [Klara Müller¹⁵]),

Die Gleichheit, 1899, Nr.6-8.

「オットー・クリレの詩集『狭い路地から』への序言」(Vorwort zu dem Gedichtband “Aus engen Gassen” von Otto Krille), Otto Krille¹⁶: *Aus engen Gassen*, Berlin 1904.

「ヘンリック・イブセン」(Henrik Ibsen¹⁷), *Die Gleichheit*, 1906, Nr.12, 13.

「ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー」(Johann Gottfried Herder¹⁸), *Die Gleichheit*, 1908/1909, Beilage Nr.3.

「オノレ・ド・バルザック」(Honoré de Balzac), *Die Gleichheit*, 1908/1909, Beilage Nr.10.

「フリードリヒ・シラー」(Friedrich Schiller), *Die Gleichheit*, 1909, Nr.3-5.

「書評: ビョルンソン『われらが力について』」(Über unsere Kraft[Bjørnson, Rezension]), *Die Gleichheit*, 1909/1910, Beilage Nr.8-16.

「革命の詩人-フェルディナント・フライリヒラート」(Ein Dichter der Revolution[Ferdinand Freiligrath¹⁹]), *Die Gleichheit*, 1910, Beilage Nr.19.

13 邦訳は、アメリカ古典文庫-7『エドワード・ベラミー』(かえりみれば—2000年より1887年, ナショナリズムについて) 中里明彦訳/本間長世解説 研究社 1975.5.

14 他に、ロシアで書いたものに、Dem deutschen Dichter Ernst Toller best Willkommengruss, Manuskript, 1926.がある。

15 Müller, Klara (1861-1905)

16 Krille, Otto (1878-1954)

17 Ibsen, Henrik (1828-1906)

18 Herder, Johann Gottfried (1744-1803)

19 Freiligrath, Ferdinand (1810-1878)

「フリッツ・ロイター」(Fritz Reuter²⁰), *Die Gleichheit*, 1910/1911, Beilage Nr.4.

「論評 労働者演劇—ルー・メルテンス『鉱山労働者』」(Ein Arbeiterdrama (Lu Märten
s“Bergarbeiter”, Rezension)), *Die Gleichheit*, 1911/1912, Beilage Nr.16.

「芸術とプロレタリアート」(Kunst und Proletariat), Stuttgart, Jan. 1911 (シュツットガル
ト労働者教育委員会第1回文化の夕べで行われた講演)

「論評 映画としての小説」(Der Roman als Kino (Rezension)), *Die Gleichheit*, 1913/14,
Beilage Nr.21.

すなわち、彼女は、クララ・ミュラー、オットー・クリレ、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー、フリードリヒ・シラー、フェルディナント・フライリヒラート、フリッツ・ロイター等の自由や解放や革命を歌ったドイツの詩人たちについて、また、ノルウェーやフランスの、ビョルンソン、イプセン、バルザック、ルー・メルテンスらの作品を直接とりあげて論評しているし、それ以外、様々な書き物のなかに、ゲーテ、トルストイ等の作家についても言及している。

これらの執筆は、19世紀の終わりから20世紀のはじめの第一次世界大戦勃発前の10数年に集中し、SPDとその女性運動との関連からいって、社会主義文学あるいはプロレタリア文学の視点から、主に女性の啓発を意識して取り上げられているといえる。

これらの論稿中、包括的でもっとも重要なものは、1911年の「芸術とプロレタリアート」と思われる。また1970年代のDDRの文芸評論の文脈でクララがどう位置付けられているかをみると、ドイツのレクラム文庫、ディーター・シュレンシュテッド、クラウス・シュテットケ編『位置確定：19世紀の終わりから20世紀初頭の文学および文化についてのマルクス主義理論史について』(Schlenstedt, Dieter und Klaus Stadtke, Hrsg. 1977)は、G.W.プレハーノフ、フランツ・メーリング、パウル・ラファルグ、マクシム・ゴーリキー、ローザ・ルクセンブルク²¹ら9名の著作をとりあげているが、その一人に(順番からいって一

20 Reuter, Fritz (1810–1874)

21 ローザ・ルクセンブルクと文学については、伊藤成彦(1991:188-205)は、「幼い頃から読書家であり、文学好きだったローザ・ルクセンブルクは、折にふれて文学論を展開している。とくに、彼女がさまざまな同志、友人たちに宛てて書いた膨大な書簡のなかには、ゲーテ、シラーからトーマス・マン、リルケにいたる作家、詩人の作品が引かれ、また論じられていて、それらを集めただけでもかなりの量にのぼる。また彼女は、ポーランドの民衆詩人ミツケヴィチや、ロシアの作家ウスペンスキー、トルストイについて文芸批評風のエッセーを書き(とくに、トルストイについては3回)、1905年のドイツ社会民主党内のシラー論争にも加わって3度にわたってシラー論を書いてもいる。そして、第一次大戦中は、獄中でロシアの作家コロレンコの『わが同時代人の歴史』をドイツ語に翻訳する仕事を続け、その序文のために、かなり長文の「ロシア文学論」をも書き残しているのであって、これらローザ・ルクセンブルクの「文学論」は、ソヴェトのローザ・ルクセンブルク研究家によって『ローザ・ルクセンブルクの芸術・文学論集』という一冊の本に編まれてさえているほどである。——1908-1912年にはエンゲルスのバルザック論も知られていなければ、『社会主義リアリズム論』もなかった。——ローザ・ルクセンブルクの文学論は、いわば社会主義文学論の扉を開いたものだった」といっているが、同時代にクララも社会主義文学論を展開していたといえるだろう。

番最後に) クララ・ツェトキーンが入っている。クララを担当したのは、当時のドイツ労働運動文学史中央研究所学術共同研究者ディーター・クリッヘ²²である。クリッヘは、シュツットガルトでのクララの文学・芸術・文化の交友関係をあげながら、「芸術とプロレタリアート」に代表されるクララの文学に関する評論を重視して、当時のSPDの文学・芸術論争のなかにクララを位置づける。時代は第一次世界大戦までに限定せず、コミンテルン時代に及び、1955年にだされたクララのモスクワでの秘書で長男マクシムの二番目の妻となったエミリア・ツェトキーン-ミロヴィドヴァ (Zetkin-Milowidowa, Emilia) 編のクララの「文学と芸術について」²³ も用いている。

冒頭で述べたように、ハンス・コッホ編のクララ・ツェトキーン『芸術とプロレタリアート』(Zetkin 1977) が、クララの主要な文学評論を網羅しているが、編者コッホは長文の序で、収録した作品について一つ一つ解説を付している。なおクララの作品は、クリッヘの論文と同じく第一次世界大戦後にまでおよび、領域としては文学のみならず、知識人問題、学校問題等クララが発言した文化面での全領域に範囲を広げている²⁴。

これらクリッヘやコッホの1970年代の、クララと文学への注目と異って、統一ドイツ後のドイツのツェトキーン研究者で、新しい伝記を描いたタニア・プッシュネラートは、1890年から1914年までの区切りでクララを論ずる章「安定した生活運営と革命的イデオロギー」のなかで、「ブルジョワ的遺産とアヴァンギャルド」なる節を設け (Puschnerat 2003;186-193) て、この間『平等』誌上に現れた文学上の記事を、今日的視点から詳細に批判的に検討する。そのプッシュネラートも「ツェトキーンは、社会主義リアリズムの理論の先駆者の一人と見なされうる」(Puschnerat 2003:191) という表現をしている。脚注21のローザの文学論との摺り合わせも必要と思われる。

2. クララの文学・芸術論に関するU.S.A.での研究:ヨアン-バンクス・ロイターサンの研究

筆者が見る限り、クララの文学論そのものを学術的研究対象としてきたのは、ヨアン-バンクス・ロイターサンの下記二つの作品である。上述プッシュネラートは、文献リストにはこの二つを挙げているが、本来なら批判する相手と思われるロイターサンに、関連箇所でも言及することはなかった。

- (1) ロイターサンの学位論文:「第二インタナショナル時代のドイツ社会民主党の文芸政策におけるクララ・ツェトキーンの例外的位置」

1980年2月、ニューヨーク大学ドイツ語・ドイツ文学部は、ロイターサンの、「第二インタナショナル時代のドイツ社会民主党の文芸政策におけるクララ・ツェトキーンの例

22 私は未見であるが、Dieter Kliche には、Zur Literatur-und Kulturauffassung Clara Zetkins, in: Weimarer Beiträge, XXXII Jg. 1976 がある。

23 筆者未見、Über Literatur und Kunst, Zusammengestellt und hg. v. Emilia Zetkin-Milowidowa, Berlin 1955.

24 しかし、クララの文学・芸術論は、第一次世界大戦前までが中心と思われる。

外的位置」と題する独文530ページにおよぶ論文に Ph.D の学位を授与した²⁵。

内容は、三つの主論文（主論文 A：クララ・ツェトキーンと第二インターナショナルのドイツ社会民主党における社会民主主義的女性運動，主論文 B：第二インターナショナル時代のドイツ社会民主党の文学問題，主論文 C：クララ・ツェトキーンの文学政策と文学理論）から構成されている。

この東西ドイツに分かれている時代に書かれた学位論文に付された要旨によって、ロイターサンの主張の要点は次の通りであることがわかる。

まず、ドイツ連邦共和国及びドイツ民主共和国両者の社会主義文学史家によると、クララ・ツェトキーンは、第二インターナショナル期のドイツ社会民主党内で、彼女の同時代人によって主張された文学政策や理論の範囲外に置かれていたものを支持していたということを知っていると書いている。さらに、1890年と1914年の間の時期に、SPD 全体は、初期社会民主労働党と結びついて自動的に発達した初期の文学的カウンターカルチャーの成長を促進することができなかったのに対し、クララ・ツェトキーンは、社会民主党員やその潜在的支持者の個人的、社会的アイデンティティを強固にする役目を果たし、彼らに、ヴィルヘルム時代のドイツに支配的であった攻撃的アンチ社会主義文化イデオロギーに対し、魅力的オルタナティブを提供することもできた強力な自律性のある文学カウンターカルチャーの創造を、社会民主党内で普及させた数少ない指導的社会民主党員の一人であったとしている²⁶。

また、破壊的で頼りない社会主義的作家や評論家の一部の人々は、主流をなした文学的伝統を「時代遅れ」と呼び、あるいはプロレタリア文学にだけ焦点を当てたが、クララ・ツェトキーンは、そのような両極端を避けて、伝統的文学の批判的選択的摂取を擁護し、同時に、同時代、すなわち革命前の時代におけるオルタナティブ社会主義文学の一層の発展を促進したとしている。ロイターサンの歴史的、記述的研究は、クララ・ツェトキーンの文学活動の深部で、彼女の既成の社会民主党の風潮からの分離と、彼女の政治的努力の全体への文学活動の統合を考察するものであった。

ロイターサンは、クララの政治的、文学的業績の間の通じ合う領域の輪郭を描くことで、第二インターナショナルの期間の社会主義文学理論におけるクララ・ツェトキーンの独特の位置を説明することを試みている。

社会民主党の女性新聞『平等』の編集者として、ドイツ社会民主党の女性運動の指導的
主要人物として、クララ・ツェトキーンは、プロレタリア女性の利益やニーズを、彼ら
の組織のための出発点とした。政治的組織として台頭する社会主義女性運動の必要性と彼

25 リサーチ・アドヴァイザーは Volkmar Sander, ドイツ語で書かれた論文である。ロイターサンは、1945年ニューヨーク生まれ。ミドルベリィ大学, NYU, ベルリン自由大学でドイツ学を修め、1977年来NYUのドイツハウスの語学部主任、1980年からNYU助手。ドイツとアメリカの女性運動についてのさまざまなテーマで雑誌論文発表。

26 この点は、先述、21世紀に入ってからのタニア・プッシュネラートの見解と異なる。

女たちの労働者としておよび主婦や母としての二重の役割における特別の関心は、ツェトキーンをして、単なる経済的・政治的闘争の範囲を超え、イデオロギイ的闘争にも主眼点をおかせることとなった。また、プロレタリア女性の要求は、ツェトキーンをして、教育、文化、演芸そしてまた文学にたいしてラジカルな批判を練り上げ、それらに新しい形式を開かせた。

以上が、ロイターサンの学位論文の主張点の要約である。

(2) ロイターサンの著書：『クララ・ツェトキーンそしてパンと薔薇—ドイツ戦前社会民主党における党と女性運動間の文学政策の対立』

ロイターサンは、上述学位論文をもとにして、1985年『クララ・ツェトキーンそしてパンと薔薇—ドイツ戦前社会民主党における党と女性運動間の文学政策の対立』という単行本を出版した。学位論文の内容を半分に短縮して次のような章構成であった。

1. 社会民主党の芸術活動へのヴィルヘルム時代の挑戦
2. 社会民主党の文学的伝統
3. 1890年から1914年の社会民主党の文学政策
4. クララ・ツェトキーンの1905年以前のプロレタリア女性の関心の認知
5. 1905年以降の『平等』の女性読者像の拡大
6. プロレタリア女性の文学的関心と要求：クララ・ツェトキーンへの文学的挑戦
7. 『平等』における文学習得の一般的傾向
8. ブルジョワ的文学的伝統の習得
9. 社会主義的作家の取得
10. 社会主義的女性執筆者の独占
11. 文学的反大衆性のツェトキーンの要求
12. シュペルバー論争におけるクララ・ツェトキーン的位置

最初の3つの章は、クララの文学政策が意味をもつ背景が論じられる。第4章、第5章では、1905年以降の「女性の利益」との関わりで、女性運動内部でのクララの組織活動が叙述される。第6章では、SPDの女性の文学に特化した要求と関心がとりあげられ、第7章から11章までは、クララの具体的文化政策の試みが、そして第12章ではクララの文学理論の位置づけと文学実践活動へのつながりが述べられている。終章では、クララの文学活動とプロレタリア女性の組織活動の基礎を固め、ドイツ社会民主党上層部に抵抗する文化政策構想が形成される原理が総括される。

1890年から1914年のあいだの時代、クララ・ツェトキーンは、自律的で社会主義的な文学的伝統の保持のために社会民主党員を鼓舞した。このことは、当時、階級闘争のために文学の価値を否定していた左派と同様、右派の党仲間の文化政策とも対立した。作者ロイターサンは、クララ・ツェトキーンがツェトキーンの文学の仕事を、実践と理論の両方から叙述し、ツェトキーンの他と異なる位置についての説明を与えている。すなわち、

ツェトキーンの文学政策は、最終的に、彼女の主要な仕事であったプロレタリア女性の組織（つまり、その関心と要求をツェトキーンがあらゆる活動領域で、文化的にも、配慮し守ろうとした女性組織）に根をもっていたという結論に達している。

1910年、ドイツの社会主義的世論のなかでいわゆる「シュペルバー論争」(Sperber Debatte)が始まった。社会民主党の支配的文化政策に反対するジャーナリストの攻撃のなかで、作家で社会民主黨員のハインツ・シュペルバー (Sperber, Heinz²⁷) が、「彼らのたたかい、彼らの信念、彼らの情熱、彼らの理想から」当時のプロレタリアートのために、社会主義的「傾向芸術」を呼びかけたのである。この考えに対して反論したのがクララの論文「芸術とプロレタリアート」と「労働者演劇」であったとロイターサンは位置づける。

以上、本稿ではロイターサンのクララの文学論の位置についての研究の表面を追ったに過ぎないので、ここでとりあげたクララの文学についての論考そのものの検討は別途稿を起こしたい。

おわりに—今後の課題

上既の覚書から、この領域でのクララの中心的文献「芸術とプロレタリアート」の詳細な検討が必要であることが理解された。また、クララの文学論そのものを対象とした研究は少ないということがわかる。ドイツ社会民主党内でこの時期に行われた文学論争（シラー論争や、シュペルバー論争）のなかでのクララの位置づけの検討や、ローザ・ルクセンブルクと文学論との対比も必要と思われる。

引用文献

- Bellamy, Eduard (1888) *Looking backward, 2000-1887*, Belknap Press of Harvard Uni. Press, 1967. (邦訳 中里明彦 1975『エドワード・ベラミー かえりみれば—2000年より1887年, ナショナリズムについて』研究社, 東京)
- 伊藤成彦 (1991)『ローザ・ルクセンブルクの世界』社会評論社, 東京.
- 伊藤セツ (2005a)「クララ・ツェトキーンのライブツィヒ時代 (1872-1880)」『大東文化大学経済論集』Vol.84, No.1, 19-34.
- 伊藤セツ (2005b)「クララ・ツェトキーンのパリ時代 (1882-1890)」(研究ノート)『昭和女子大学女性文化研究所紀要』No.32, 43-55.
- 大塚金之助 (1969)『ある社会学者の遍歴』岩波書店, 東京.
- Kliche, Dieter (1977) “Clara Zetkin (1857-1933)” in: Schlenstedt, Dieter und Klaus Städtke, Hrsg. *Positionsbestimmungen, Zur Geschichte marxistischer Theorie von Literatur und Kultur am Ausgang des 19. und Beginn des 20. Jahrhunderts*, Verlag Philipp jun, Leipzig. 369-415.
- Puschnerat, Tania (2003) *Clara Zetkin, Bürgerlichkeit und Marxismus, Eine Biographie*, Klartext, Essen.
- Reutershan, Joan-Banks (1980) Clara Zetkins Ausnahmeposition in der Literaturpolitik der Deutschen Sozialdemokratie in der Epoche der II Internationale, New York Uni. (英語名は, Clara Zetkin's Excep-

27 Heinz Sperber とはオランダの劇作家 Herman Heijerman (1864-1924) の筆名である。

tional Role in the Literary Politics of German Social Democracy during the Epoch of the second International.)

Reutershan, Joan (1985) *Clara Zetkin und Brot und Rosen*, Perter Lang, New York, Berne, Frankfurt am Mein.

Schlenstedt, Dieter und Klaus Städtke, Hrsg. (1977) *Positionsbestimmungen, Zur Geschichte marxistischer Theorie von Literatur und Kultur am Ausgang des 19. und Beginn des 20. Jahrhunderts*, Verlag Philipp jun, Leipzig.

志真斗美恵 (2006) 『ケーテ・コルヴィッツの肖像』 續文堂出版, 東京.

Zetkin, Clara (1886) Louise Mitchel nach Ihren Memoiren, *Die Neue Zeit*, Vol.4, 210-221, 270-285.

Zetkin, Clara (1889) (Transrated) *Ein sozialistischer Roman "Ein Ruckblick 2000-1887,"* Nach dem Amerikanischen des Eduard Bellamy, Berliner Arbeiterbibliothek II, Verlag der Berliner Volks-Tribune, Berlin, 1889.

Zetkin, Clara (1977) Koch, Hans. Hrsg. *Kunst und Proletariat*, Diez Verlag, Berlin.

(いとう せつ 大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授)